

Title	ポール・ヴァレリー『ストラトニケー』（抄訳）
Sub Title	“Stratonice” de Paul Valéry : une traduction abrégée
Author	田上, 竜也(Tagami, Tatsuya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2006
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 No.42 (2006. 3) ,p.81- 95
JaLC DOI	
Abstract	<p>以下に訳出するのは、ポール・ヴァレリーの未完草稿『ストラトニケー』の一部である。企図としては1922年頃に始まり、1930年から35年にかけて精力的に執筆され、さらに生涯書き継がれたこの作品草稿は、フランス国立図書館に収められ (Naf 19034 ff.76-302) 全体で200葉以上の紙片からなる、ヴァレリー未完作品のなかでも大規模なものである。もとよりここでそのすべてを紹介することは不可能であり、また草稿全体を見通した詳細な分析も別の稿に委ねることとして、ここではユゲット・ロランティによって活字化された部分のなかから、対話下書き草稿を主として抄訳した。作品の構想については既にいくつかの先行研究によってあきらかにされているが、主題はアングルによる、シャンティイおよびモンペリエ美術館にある絵画から触発されたものであり、その原作はプルタルコスの『対比列伝』（「デメトリオス」）に遡る。話の筋は主要な4名の登場人物、すなわちシリア王セレウコス（『カイエ』の構想ノート（C, XX, 714）によれば53歳）、王妃ストラトニケー（マケドニア王デメトリオスの娘。同15歳）、王子アンティオコス（1世ソーテール。同18歳）、および医者エラシストラトス（同40歳）を軸に展開され、その中心となるのは王子の、年若い義母である王妃への道ならぬ恋と、それを知った王から王子への、王妃の譲渡である。全体はプロローグおよび3幕（あるいはそれにエピローグを加えた）構成からなり、その内容は次のとおりである。まずプロローグでは門番の道化的な語りによる状況説明。第1幕では、王と王妃との会話。王は王妃に、原因不明の病床にある王子の自殺を阻むべく剣を盗むことを命じる。王と医者との対話。第2幕では、剣がないことに気付いた王子の怒り。王子の病の原因を突きとめるよう命じられた医者による診察。肉体的な病気との最初の診断と王への報告。再び患者のもとに戻った医者の眼前を王妃が通り過ぎる。病の原因の発見。第3幕では医者の独白と王への報告。王の怒りと王子への殺意。王の独白に</p>

つづく最後の決断。大団円となる登場人物による「4重唱」。主要な登場人物4名のうち、老いや死の恐怖、愛の蹉跎に苦悩する王セレウコス（草稿では王妃との肉体的非交渉が想定されている）に作者ヴァレリーのもっとも直接的な投影を見出すのは容易だろう。カトリヌ・ポッジィやルネ・ヴォーティエとの恋愛体験に由来する工口スの隘路や、現実的存在、時間内存在である自己を目の当たりにすることによる苦悩という主題は、この作品と、やはり工口スの惑乱から産まれた『天使』とを引き寄せるものである。けれども、王セレウコスのみがヴァレリーの分身であると考えるのは短絡にすぎよう。この作品もヴァレリーのそのほかの対話篇と同じく、ひとつの精神において営まれる内的対話を外在化したものであり、精神が保持する多様性を関係性のうちに表現したものとイえるからである。その意味で4者はいずれも作者の反映というべき存在であり、相似的ないし相補的關係をなしながら生の全体を表現している。実際この4者は、老い、叡智（セレウコス）に対する若さ、行動力（アンティオコス）、知性、饒舌（エラシストラトス）に対する身体、寡黙（ストラトニケー）……という対称性のうちに配置されている。息子に対する情愛のうちに妻への愛を断念する王は、王子のうちに「別なる自己」を認めており、両者は「他」にして「同一」という明快なナルシスの鏡像関係を形成する。また一貫して受身な存在である王妃ストラトニケーにしても、現実的女性というよりもパルクやアティクテの造形を受け継ぐ、内的女性性の化身にほかならない。対称性にさらに着目するなら、王と王子の双方から愛される王妃のみならず、両者の対話相手となる医者エラシストラトスも同様に關係のなかで蝶番的な役割を担っており、彼は劇の演じ手かつ観察者として、生命の神秘や身体と精神との葛藤を代弁する語り手である。人物たちのそうした形式的配置が、生の循環を象徴する黄昏から夜明けにかけての時間軸に沿って、筋を展開させていく。この作品はオリアントギリシャ趣味による音楽劇として構想され、『アンフィオン』や『セミラミス』といった劇作の系列に属するが、精神と身体、「檻のなかの鼠」によって象徴される苦悩の回帰などは工口ス体験を直接の契機とし、対話篇『神的ナル事柄ニツイテ』と多くの共通点を持つ。最終的に『我がファウスト』に流れ込んでいく主題系を理解するうえで、欠くことのできない作品草稿といえるだろう。

Notes

Genre

Departmental Bulletin Paper

URL

https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20060331-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ポール・ヴァレリー

『ストラトニケー』（抄訳）

田上竜也

以下に訳出するのは、ポール・ヴァレリーの未完草稿『ストラトニケー』の一部である。企図としては1922年頃に始まり、1930年から35年にかけて精力的に執筆され、さらに生涯書き継がれたこの作品草稿は、フランス国立図書館に収められ（Naf 19034 ff.76-302）全体で200葉以上の紙片からなる、ヴァレリー未完作品のなかでも大規模なものである。もとよりここでそのすべてを紹介することは不可能であり、また草稿全体を見通した詳細な分析も別の稿に委ねることとして、ここではユゲット・ロランティによって活字化された部分¹⁾のなかから、対話下書き草稿を主として抄訳した²⁾。

作品の構想については既にいくつかの先行研究によってあきらかにされているが³⁾、主題はアングルによる、シャンティイおよびモンペリエ美術館にある絵画から触発されたものであり⁴⁾、その原作はプルタルコス『対比列伝』（「デメトリオス」）に遡る。話の筋は主要な4名の登場人物、すなわちシリア王セレウコス（『カイエ』の構想ノート（C, XX, 714）によれば53歳）、王妃ストラトニケー（マケドニア王デメトリオスの娘。同15歳）、王子アンティオコス（1世ソーテール。同18歳）、および医者エラシストラトス（同40歳）を軸に展開され、その中心となるのは王子の、年若い義母である王妃への道ならぬ恋と、それを知った王から王子への、王妃の譲渡である。

全体はプロローグおよび3幕（あるいはそれにエピローグを加えた）構成からなり、その内容は次のとおりである。まずプロローグでは門番の道化的な語りによる状況説明。第1幕では、王と王妃との会話。王は王妃に、原因

不明の病床にある王子の自殺を阻むべく剣を盗むことを命じる。王と医者との対話。第2幕では、剣がないことに気付いた王子の怒り。王子の病の原因を突きとめるよう命じられた医者による診察。肉体的な病気との最初の診断と王への報告。再び患者のもとに戻った医者の眼前を王妃が通り過ぎる。病の原因の発見。第3幕では医者の独白と王への報告。王の怒りと王子への殺意。王の独白につづく最後の決断。大団円となる登場人物による「4重唱」。

主要な登場人物4名のうち、老いや死の恐怖、愛の蹉跎に苦悩する王セレウコス（草稿では王妃との肉体的非交渉が想定されている）に作者ヴァレリーのもっとも直接的な投影を見出すのは容易だろう。カトリーヌ・ポッジィヤルネ・ヴォーティエとの恋愛体験に由来するエロスの隘路や、現実的存在、時間内存在である自己を目の当たりにすることによる苦悩という主題は、この作品と、やはりエロスの惑乱から産まれた『天使』とを引き寄せるものである。けれども、王セレウコスのみがヴァレリーの分身であると考えるのは短絡にすぎよう。この作品もヴァレリーのそのほかの対話篇と同じく、ひとつの精神において営まれる内的対話を外在化したものであり、精神が保持する多様性を関係性のうちに表現したものといえるからである。その意味で4者はいずれも作者の反映というべき存在であり、相似的ないし相補的關係をなしながら生の全体を表現している。実際この4者は、老い、叡智（セレウコス）に対する若さ、行動力（アンティオコス）、知性、饒舌（エラシストラトス）に対する身体、寡黙（ストラトニケー）……という対称性のうちに配置されている。息子に対する情愛のうちに妻への愛を断念する王は、王子のうちに「別なる自己」を認めており、両者は「他」にして「同一」という明快なナルシスの鏡像関係を形成する。また一貫して受身な存在である王妃ストラトニケーにしても、現実的女性というよりもパルクやアティクテの造形を受け継ぐ、内的女性性の化身にほかならない。対称性にさらに着目するならば、王と王子の双方から愛される王妃のみならず、両者の対話相手となる医者エラシストラトスも同様に関係のなかで蝶番的な役割を担っており、彼は劇の演じ手かつ観察者として、生命の神秘や身体と精神との葛藤を代弁する語り手である。人物たちのそうした形式的配置が、生の循環を象徴する黄

昏から夜明けにかけての時間軸に沿って、筋を展開させていく。

この作品はオリエント—ギリシャ趣味による音楽劇として構想され、『アンフィオン』や『セミラミス』といった劇作の系列に属するが、精神と身体、「檻のなかの鼠」によって象徴される苦悩の回帰などはエロス体験を直接の契機とし、対話篇『神的ナル事柄ニツイテ』と多くの共通点を持つ。最終的に『我がファウスト』に流れ込んでいく主題系を理解するうえで、欠くことのできない作品草稿といえるだろう。

『ストラトニケー』抄

☆

ストラトニケー

劇の一切は、二度おのれの人生を量る王のうちにある

一度はアンティオコスのために

一度はストラトニケーのために [……]

☆

ストラトニケー

劇の各登場人物は——互いに異なった段階と局面における人生である——

ここでは年齢が主たる要因である

年齢——欲望間、能力間の隔たり

王。

王の——最後の言葉——だが結局のところ彼とは「私」である—— [……]

☆

ストラトニケー

第1に、寄生する愛の研究。

観念のようなもの、心的主題のようなものが、生き物のなかで生き物の価値をもちうる。[……]



門番

俺は最も大事な人物だ——王宮の女たちは夜間に外出する、宦官たち
俺は何もかも知っている——

俺は門だ。すべては俺を通過する——俺は通りがかりに噂を耳に挟む。それ
らを眺め、あるいは取っておく。俺は耳打ちし、耳打ちされる。

王は死ぬほどの不安のうちにいる——彼は3日間外出していない——そ
して王妃は？ われらが王妃——おかげさまで俺は一度も彼女を見たこ
とがない—— [……]

エラシストラトス 生体のあらゆる神秘に対抗するに、私にはおのれの精神
しかない。私には、死の手管と策略に対抗するに、それしか持っていないの
だ。なんと多くの考え、理由、言葉が私に思い浮かぶことか、多くの比較が。

私は何も約束することはできない。われわれがあれほど多くの事を知りな
がら生命については何も知らないのは、驚くべきことではないか。



ストラトニケー

I 士官たちの対話——彼らはロンドンの衛兵交代のように行き来している
おそらく4名？ 夕暮れの緋色の光

それらは見事な一隊だった、友よ

彼らはみな自分の考えを持っていなかった——

彼らの指揮官はひとつの考えを持っていた——しかし

そして彼らの将軍は2、3の考え——また多くの策略を持っていた

このプロローグ —— 1° 要約された、軍隊に関する事柄全体

2° 医学に関する事柄全体 ……

3° 王宮の状況と描写される4人の登場人物。

4名のうち医者のみが——

これは計算されうる——

注 医者の入場から。

彼を基底に据える必要がある——

彼を常に舞台にとどめておくことができるだろう、彼が同時に役者であり観客であるかのように。これは新機軸となろう。返答の台詞は傍観者の台詞ともなるだろう——?? 以上のことはひとつの関係をもたらずだろう

☆

ストラトニケー

——病が「愛」であったことが明らかになる。

それは場のきわめて強い変形を生み出すはずだ。

王とエラシストラトスの最初の会話はまったく身体的な病についてなされる。天蓋つきの輿。乳母。

第2の変形、それは唯一の対象である王妃である。

エラシストラトスの身体に関する言明——この世の事物のなかで精神から最も離れたもの、その理由。例えば視覚、——さらに、行為。

☆

ストラトニケー

——

以下は私がストラトニケーのために見出す独創的な筋の急転である。

医者によって真相を知らされた王は、ストラトニケーへの愛を息子への愛の犠牲にする決心がつかず、絶望に陥っている。

ここで——ふたつの愛をよく感じさせることが出来る。ひとつはストラトニケーがその最後の「幸福」——すなわち可能性の幻影、若さ、女性にとつての価値、を表している彼の人生における情愛、そしてもうひとつは自分が再生産されるという感情……言葉では表現しがたい両者。

状況は錯綜している。彼が自殺することを、殺すこと等々を願うのは、ある弱さが——彼に——思い出され、彼の自尊心を傷つけるときだ、彼は衰弱しきってしまう——そのとき彼はS [ストラトニケー] を与えることができる。

もはや勇気がない——愛することの。

ストラトニケーは独白しか発してはならない。

☆

ストラトニケー

アングルによって描かれた主要な場

だがテラスでは——星空——

そこにストラトニケーが息をつきにやってくる。

——

数歩の後に横たわるアンティオコス——

別々に発せられる言葉

第1場——ストラトニケーが通り過ぎ、相談相手の女と話し、彼女を帰らせる——ひとりで語る——散歩するために退場する。

第2場 アンティオコスと医者 暑い、息が詰まる、という同じ言葉を繰り返す

医者は星を話題にする——

第3場 ストラトニケーが戻ってくる——無言でいる——退場——

第4場 アンティオコスが苦悶する——

☆

ストラトニケー

アンティオコスの独白

駆り立てられる。このことが私をかくも苦しめるということがありうるのか？

すべてのなかで最も恐ろしいこの種の闘争。

それは何のうえに成り立っているのか？ 何が私を捕らえ打ちのめすのか、

場

そして何が私を幸福から引き離すのか？ 差し向けられ、追い払われる

(彼は父の殺害を思い浮かべる)

踊り子と遊女たち

内的な大蛇の描写

ストラトニケーの心像

夢？

この「独白」は、恋が疑われる前の
成果のない最初の診察に続くべき
循環形式によって音楽的に規定された独白 沈黙の場の後に置かれる。
舞台では決して語られなかった具合に、「エロス」について語る事が重要
である。

台詞のない場については、

=, =, =, =, =, =, =, =, =, =, =, =, =, =, =, =,
プロローグ

兵士たち。噂。

アンティオコスの価値についての語り

活発さ

☆

ストラトニケー

眠り込んだアンティオコス

王とエラシストラトス

王 彼は毒を盛られたのではないか？

王宮はしっかり護衛されているが毒についてはどうか？

——エラ [シストラトス] 存じ上げません……

王 おまえはそれを考慮できるだろう——彼は深く眠り込んでいる

誰かが彼に水薬を渡したのだ

[……]

プロローグ 王宮

心臓。主要な登場人物。

アンティオコスの眠り

エラシストラトスが最初にそれを話し

次に語るのは心臓である

ひとたび臓器が登場人物になるならば

アンティオコスの独白

私は偽らなければならない。

中尉？ との対話

つづいて王妃が天蓋つきの輿に乗って、アンティオコスには見えない輿を通る。

声。王子の具合はいかが。

☆

ストラトニケーの断片 [楽曲]

プロローグとして 王妃の美しさ

王子の価値

戦略

医者

(そしてエラシストラトスの妻)

I. 王 ストラトニケー

彼が彼女を所有しなかったことが仄めかされる。

彼女に、王子から剣をかすめ取りに行く任務を与える(あるいは彼女がその考えを抱く)

(剣への祈願??)

王とエラシストラトス

II. 反応 (a)

(b) 剣の無い王子の怒り

王とエラシストラトス

王子とエラシストラトスふたりきり

診察

検査

(これらだけで丸ひとつの戯曲をなす)

あなたにはこのような症状がありますか? いや

王とエラシストラトス 最も優しい手がお前に

病人のところへ戻る 剣を返すだろう

王妃の通過

III. エラシストラトスの独白

王とエラシストラトス

王の危機——(c)

ストラトニケーとの別れ

☆

(ストラトニケー) 第2幕あるいは第3幕

アンティオコス——医者であり賢くはあってもお前は知らない…… この病の毒が何であるのかを。ほんの些細なことが矢となる——そして各々の思考はただ存在しているだけで、持ち上げようとしても墓石より重い——人は胸[にさまざまな思い]を持っている。時に涙は不意を襲い、時に手は再び閉じて堅くなる——その手は殺すことを夢見る⁵⁾。それほど力が閉じ込められた潜在力のままにとどまっていることは——そして捕らわれの虎にも似たこの種の怒りが——何かある神秘によって——事物を、意志を揺るがさないということ、運命と神々を拘束しないということは、不可能に思える

エラシストラトス 王子は何とおのが身を壊してしまったことか!

アンティオコス 神々の反抗以上に現実的なものがあるろうか。人がおのれのうちに絶望のそのような宝を持っているのは何と奇妙なことか!

☆

ストラトニケー

アンティオコス——

独白…… 私は以前あの貌を考えてはいなかった——

今しがたまで私は自由であった、そして私の思考は精神の水晶のなかをあらゆる方向に動いていた——

だが突然お前が来た、ストラトニケー、そしてどんな些細なこともお前を照らし出す——

私は船のように、ほんの小さな裂け目のため海水に満たされている。私は自分の苦悩に深く入り込む——私は洗む⁶⁾

おお、私はお前を捕らえ、捕らえずにいる、お前に触れ、そして触れないでいる——私はお前を形作り、頭から足先までお前を辿る

それから、私はお前を自分から引き離したいと思う——想像するのだ、お前が死んで、おぞましく、冷たくなり、あれほどまでに愛された物質が変わり果てるのを……

☆

ストラトニケー

(パイドロス) 7)

賢者よ、師よ、どうして彼女に可能なのでしょうか、たとえ彼女が完璧で、普遍的な美に恵まれているとしても、ただひとりの男が不敬虔にならずには独占したいと願いもできないということが。——あらゆる眼に身を売り、それでいて近づくことができず、捉えることができず、指先をすりぬけ——取り集めて箱に閉じ込めてしまうことができない陽の光と同じように。けれどもどうして彼女は、死すべきものであり、人体の組織を備えながら、私が知るところではアンティオコスが彼女にささげ、それゆえに憔悴させられたあれほどの愛に対して無感覚でいられるのか。確かに、彼が苦しんでいるのは愛されないこと——それ自体——だけではありません。彼の病が極度に昂進しているのは、狂乱した自分のうちに感じるあれほどの力と思考のきわめて強力な集中、——かくも嘆願的な意思、——永続的な情愛の現れ、——つまり、英雄としての彼の本性全体から出される比類のない音にも似た絶え間ない高揚が、——孤独な子供の鋭い叫び声のように、——等々のように、まったく無駄であると理解することができない、ということによるのです。ただ応えるのは愛想よく拵えられた微笑みだけ……等々

——（ソクラテス）——どれほど多くの毒が出口のない心のうちで産み出されることか！ 私には王子の苦しみが了解できる。だがそれこそ、あらゆる存在の運命というものではないか、何に対してであれ無限の価値を与えるに十分なほど大きな魂を持つ時には。あるいは、行為の無力さであり、本質的な善の確かな廃墟の前で何も感じずにいることの不可能性である絶望が——だれであれ捕らえてしまう時には。そして、救いも答えもいかなる存在のしるしも引き出すことのできない神に対して人間が嘆願し、切願し、時には侮辱する時、みずからの限界の不可解さを感じないなどと、お前は信じるの

か——同じく彼がおのれの努力の愚かさや、意思の屈辱的な素朴さや、精力と理性との闘争の混乱を感じないなどと。かかる理性は人間に、われわれと尺度のまったく異なるものとは競わないようにと助言してくれるのだが。

ある種の青銅の壺を揺り動かすべく存在するのはある種の音だけだ。そして、もしお前の声あるいは豎琴がその音を有していなければ、壺がそれらによって覚醒され／刺激されて鳴り響くことは決してないだろう。

魂——それは死すべき人間にとっては、みずからの内部に抱えている共鳴する実体のようなものだが、それは感動させることなしに感動させられることができる。それこそ、生命のない物体においては存在しない神秘である。それをどのように説明できようか。われわれはいかに、われわれ自身を欲することのできないものを欲することができるのか。

ソクラテス 魂とは、パイドロスよ、時々、いや——常に——身体と精神を共鳴させる奇妙な機能である。

☆

ストラトニケー

E [エラシストラトス] 申し述べさせてください、ああ王よ、そしてわれらが古の賢人たちの秘密から私が受け取った教えをあなたに伝授させてください。

今日まで王のひとりとしてその教えをお知りになることはありませんでした、あるいは少なくとも王の誰かがそれを理解なさったとは存じ上げません。

R [王] なぜ彼らはそれを理解しなかったのか。

E 帝国を導いていくうえでそれを示すものが何もなかったからです。それに一切はまったく異なることでしょう、もし……

R 話さない。

E 王よ、すべては人間が複数等々であるかのように行われています。しかしこれが、隠されたその真実です。それは、人間とはただひとりしかおらず、それが自身の似姿を増殖させている、ということです。ちょうど、ひとつの波があればそのほかの波を理解するに足り、それぞれの波が、踊りながら、

同一の太陽の像を映しているように。

☆

ストラトニケー

——
セレウコス

(アンティオコスの恋の知らせ)

なんという不幸だ！ だがなんという必然的な不幸か！

これ以上に事物の本性から作られた不幸はあろうか。

私はそれを自分の魂のうちに見る——ある時は神聖で、正当なるものとして——またある時は耐えがたき状況として。

行きなさい——私は自分が主人であり、望む者に死を与えることができるということを忘れてはいない。

王妃は彼を愛しているのか？

——
王妃は彼を愛しているのか？ 私を愛しているのか？

医者

存じません。彼女はしかるべくあらねばならないと私は考えます。

王

彼女は若い——

よいか——お前は最後の恋がどういうものであるか知らないのだ。

医者

王様、われわれは同じような年齢です。私はそれを存じております……それが最後のものであろうことも——等々。けれども私の職業は理解することです……

王

だがどのようにしてお前はそれを知ったのか？ 誰がお前にそれを言ったのか？⁸⁾

☆

ストラトニケー

別れ

一体なぜお前はそんなに悲しげなのか、ストラトニケー？

そう思われますか？

苦しんでいるのか？

(いいえ)

何か不足でも？

(私の願いはすべて満たされています)

その手を私に……

S [ストラトニケー]. しかしあなた、王様、あなたこそお悲しみのようにお見受けします。あなたの目にはそれが見て取れます……

なぜ目をお逸らしになるのですか——ご心配そうな目を

王子の具合はいつそう悪いのですか？

あなたはもはや王妃を愛していないのですか？

R [王] おそらく……

だが私はそなたによって悲しいのだ

R 神秘的な女性だ

S いったい私が何をしたのですか？ S はい……時々私は自分を未知の

R お前の運命が私のうえにのしかかる。

ものと感じます

S 何をおっしゃるのですか、私の王様。

R 話しなさい——誰も恐れることなく——

ひとりで、自由でいるときに、誰のことを思うのか——

お前の考えに——戻ってくるのは私か

S あなたの優しさはいつも心のなかで優しく私に微笑みかけてくださいます。

R そう、私の優しさは今夜お前に悲しく微笑みかける

王子への賛辞——なんと哀れなこと、あれほど偉大な王子が。

☆

ストラトニケー

 セレウコスが医者に

(彼はひとりでいるかのようにストラトニケーについて話す)

彼女は私の腕のなかであたかも少女のようだ。お前が理解できるかどうか
わからない……あの豊かさを。

彼女は私から、まるで生命を、幼年期を、青春期を、父性を——活力を、
そして弱さを引き出すかのようだ。

彼には私のように彼女を愛することはできないだろう。

あれほど若く美しい男が、あの幼い王妃にいかなる価値を与えるというの
か、彼がこれから生きうる多くの年月の間、望みだけ多くの美を見出すこと
が確かだというのに。

彼の若さとは——この豊富さ、等々の感情ではないのか。——だが「私」
は——もはや尽き果てている。

医者

では、王様、彼には死を？

(非常に長い沈黙)

王

彼は生きるだろう。彼が生きながらえるよう計らいなさい。

幕。

最終場——客観的な言葉で。すべては表現と身振りのうちに。

幕。

註

- 1) *Stratonice* : textes inédits présentés par Huguette Laurenti, in *Cahier Paul Valéry 2 « Mes théâtres »*, Gallimard, 1977, pp.233-263. 紙幅の関係上、対

話下書き部分はほぼ完全な形で、構想メモ部分は重要な箇所を抜粋して訳出した。

- 2) 『カイエ』中にもこの作品の関連断章が多く認められ、そのいくつかは筑摩書房版『ヴェレリー全集カイエ篇』6巻(「エロス」の章、清水徹訳、1981)にも含まれている。ただし草稿自体の紹介は日本ではまだなされていない。
- 3) P.O. Walzer, « Deux essais sur l'amour : Béatrice et Stratonice », in *Revue d'Histoire littéraire de la France*, janvier-février 1968. Ned Bastet, « Stratonice et l'impossibilité de la tragédie », in *Bulletin des Etudes valéryennes*, avril 1975. Huguette Laurenti, « Le dossier « Stratonice » : construction d'une tragédie », in *Cahier Paul Valéry 2 « Mes théâtres »*, pp. 265-299.
- 4) アングルは師ダヴィッドも扱ったこの画題について、1807年以来いくつもの作品を残している。有名なシャンティイ、コンデ美術館蔵の『アンティオコスとストラトニケー』(1840)は、古代ローマ風の緻密な装飾を背景に、病床のアンティオコスを画面の中心やや右寄りに置き、その周りに絶望した王や召使、真相を突き止めようとするエラシストラトスをめぐらせ、一方左手には彫像のように孤立して立つストラトニケーが配されている。モンペリエ美術館にあるのはアングル晩年の未完作品だが、人物の向きや細部は異なるものの、ほぼ同様の場面が描かれている。
- 5) 右側に追記。「エラシストラトスは奴隷の耳に囁く。彼の剣を盗み——注意深く隠せ。」
- 6) ヴァレリーによる抹消。
- 7) この作品の主要登場人物ではないソクラテスとパイドロスの登場は、ヴァレリーの他のプラトンの対話篇、特に『神的ナル事柄ニツイテ』との、作品系列上の関連を窺わせる。
- 8) 左余白追記「ここに取り囲まれた鼠／ψ／鼠／あらゆる可能性／心像／解決すること」。右余白追記「あなたは死を与えることができる、だがすべての女はあなたのもの／王 いや——あの女、私の妻は私のものではまったくない。ただひとりの女が私にとって重要なのだ」。